

福井県における
野生鳥類・哺乳類の救護状況*
- 1990～1995年度 -

大迫義人¹

はじめに

野生鳥類・哺乳類の保護のひとつとして、環境庁指導のもと傷病個体の救護事業が各都道府県で実施されている。福井県においても、1980年度に鳥獣保護センターが開設されるとともに本格的な救護が開始され、1990年度からは自然保護センターで継続されている。この事業の結果の概略は公表されてきたが(福井県自然保護センター 1994, 1995, 1996)、詳しい情報はまとめられていない。もし、傷病や死亡の原因が人為的であったことがわかれば、その改善を指導・普及することによって死亡率の減少が期待される(柳川 1993, 柳川・澁谷 1996)。そこで、1990～1995年度に福井県獣医師会および福井県自然保護センターで救護された種、件数、個体数、場所、時期および原因などについて整理・分析してみた。

資料と分析

資料として、1990～1995年度に、福井県獣医師会(以後、獣医師会と略す)で救護された鳥類・哺乳類のカルテと福井県自然保護センター(以後、センターと略す)での救護の記録を用いた。獣医師会は、県内一円の、14～21名の会員獣医師に治療を依頼し、大野市南六呂師にあるセンターは、幼鳥獣および治療後の個体の野生復帰のリハビリを行なっている。

獣医師会、センター別および鳥類、哺乳類別に、救護された種、件数、個体数を年度別にまとめ、場所、時期、原因および野生復帰の状況については、6年分を合計してまとめた。野生復帰率は、救護個体数が10個体以上の種に限り、治療または飼育後に自然に放野できた個体数の割合として算出した。

* 福井県自然保護センター研究業績 第49号

1. 福井県自然保護センター。〒912-01 福井県大野市南六呂師169-11-2

表2. 救護された鳥類・哺乳類の種と個体数(福井県自然保護センター取り扱い).
 Table 2. Species list and number of birds and mammals treated by the Fukui Nature Conservation Center.

Order	Family	species	Scientific name	1990	1991	1992	1993	1994	1995	計	%	
鳥類 Aves	アビ	シロエリオオハム	<i>Gavia pacifica</i>						1	1		
		サシカモ	<i>Botaurus stellaris</i>						1	1		
		コウノトリ	ササキ	<i>Nycticorax nycticorax</i>		2	1	1	2	6		
			ササキ	<i>Bubulcus ibis</i>						1	9	
			ササキ	<i>Ardeia garzetta</i>		1		1		2		
			ササキ	<i>Ardea cinerea</i>		1				1	2	
			ササキ				3			3		
			ササキ					1		1		
			ササキ						4		4	
			ササキ			2					2	
ガンカモ	ガンカモ	コハクモヨウ	<i>Cygnus columbianus</i>					1		1		
		マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>		1					1		
		カルガモ	<i>Anas boschas</i>			2				2		
		ホシハシロ	<i>Tringa erythrorhynchos</i>				1			1		
		ウシタカ	ウシタカ	<i>Elanus minorans</i>		3	2	5	2	5	17	70.6
			ウシタカ	<i>Accipiter gularis</i>			1				1	
			ウシタカ	<i>Accipiter nisus</i>					1		1	
			ウシタカ	<i>Buteo buteo</i>				1			1	
			ウシタカ	<i>Buteo indicus</i>						1	1	
			ウシタカ	<i>Buteo japonicus</i>						1	1	
キジ	キジ	ハヤブサ	<i>Falco columbarius</i>					1		1		
		キジ	<i>Phasianus colchicus</i>		2	13	3		1	19	0.0	
		キジ	<i>Gallinula chloropus</i>			1				1		
		キジ	<i>Vanelanus cinereus</i>				1			1		
		キジ	キジ	<i>Gallinago gallinago</i>			1				1	
		キジ	キジ	<i>Gallinago hardwickii</i>						1	1	
		キジ	キジ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>						1	1	
		キジ	キジ	<i>Sphenurus sieboldii</i>		1			1		2	
		キジ	キジ	<i>Columba livia</i>		4	4	3	1	5	21	61.9
		キジ	キジ	<i>Columba livia</i>						1	1	
ホトトギス	ホトトギス	ホトトギス	<i>Oculus canorus</i>						2	2		
		ホトトギス	<i>Oculus saturatus</i>				1			1		
		ホトトギス	<i>Mixoxolops japonicus</i>				3		2	5		
		ホトトギス	<i>Sitta yezoensis</i>		1	1					2	
		ホトトギス	ホトトギス	<i>Caprimulgus indicus</i>			2				2	
		ホトトギス	ホトトギス	<i>Halcyon coromanda</i>				1	1		2	
		ホトトギス	ホトトギス	<i>Picus avokera</i>				1	1		2	
		ホトトギス	ホトトギス	<i>Dendrocopos kizuki</i>			1				1	
		ホトトギス	ホトトギス	<i>Alauda arvensis</i>		1					1	
		ホトトギス	ホトトギス	<i>Hirundo rustica</i>		3	10	5	10	11	39	33.3
ツバメ	ツバメ	ツバメ	<i>Hirundo daurica</i>			1		1		2		
		ツバメ	<i>Notacilia cinerea</i>		1	1				2		
		ツバメ	<i>Notacilia cinerea</i>						4	4		
		ツバメ	<i>Notacilia cinerea</i>				2			2		
		ツバメ	<i>Notacilia cinerea</i>						1	1		
		ツバメ	<i>Luscinia caliope</i>						1	1		
		ツバメ	<i>Zoothera dauma</i>		1			1		2		
		ツバメ	<i>Cettia diphone</i>			4				4		
		ツバメ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>				2			2		
		ツバメ	<i>Phylloscopus borealis</i>						1	1		
シジゴウカラ	シジゴウカラ	シジゴウカラ	<i>Parus varius</i>					4		4		
		シジゴウカラ	<i>Parus major</i>					1		1		
		シジゴウカラ	<i>Zosterops japonica</i>			3				3		
		シジゴウカラ	<i>Emberiza rustica</i>				1			1		
		シジゴウカラ	<i>Carduelis sinica</i>					1		1		
		シジゴウカラ	<i>Uragus sibiricus</i>			1				1		
		シジゴウカラ	<i>Passer montanus</i>			1	3		2	3	9	
		シジゴウカラ	<i>Sturnus cineraceus</i>		2	5			17	7	31	38.7
		シジゴウカラ	<i>Sturnus cineraceus</i>					2			2	
		シジゴウカラ	<i>Corvus coreanus</i>						2		2	
シジゴウカラ	<i>Corvus macrorhynchos</i>						1		1			
計14目	28科	54種		種数	11	14	15	17	21	19	54	
				個体数	15	33	48	32	56	49	233	40.3
哺乳類 Mammalia												
サル	オナガサル	ニホンサル	<i>Macaca fuscata</i>		1					1		
ウサギ	ウサギ	ノウサギ				1		1		2		
ネズミ	リス	ホンネズミ	<i>Pteromys mononga</i>						3	3		
		ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>			3	1			4		
ネコ	クマ	クマ	<i>Ursus thibetanus</i>				1	3		4		
		クマ	<i>Procyon lotor</i>						1	1		
		クマ	<i>Vulpes vulpes japonica</i>		1	1					2	
		クマ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>		3	1					4	
		クマ	クマ	<i>Martes melampus</i>			1				1	
		クマ	クマ	<i>Mustela furo</i>							1	
ウシ	ジャコウネコ	ジャコウネコ	<i>Meles meles anakuma</i>			1				1		
		ジャコウネコ	<i>Pauma larvata</i>				1			1		
		ジャコウネコ	<i>Sus scrofa</i>							1	1	
		ジャコウネコ	<i>Cervus nippon</i>							2	2	
ウシ	ウシ	ウシ	<i>Capricornis</i>						1	1		
ウシ	ウシ	ウシ			1	5			6			
ウシ	ウシ	ウシ						6	10	16		
ウシ	ウシ	ウシ						1	9	10		
計5目	11科	15種		種数	3	6	5	1	6	10	15	
				個体数	5	8	6	1	9	18	47	21.3

結 果

救護された鳥類・哺乳類の学名は表1, 2にまとめた.

1. 種と個体数

1990～1995年度の6年間に獣医師会で取り扱った種と個体数は、鳥類の17目32科90種802個体、哺乳類の4目7科8種57個体であり、センターでは、鳥類の14目28科54種233個体、哺乳類の5目11科15種47個体であった（表1、2）。合計して、鳥類の計17目34科104種1,035個体、哺乳類の計5目11科15種104個体であった。

獣医師会で最も多く取り扱った種は、鳥類ではドバトの107個体（13.3%）、哺乳類ではタヌキの16個体（28.1%）であり、センターでは、それぞれツバメの39個体（16.7%）、タヌキの6個体（12.8%）であった。

毎年、獣医師会では、平均 143 ± 34 （SD）件、 41 ± 6 （SD）種、 143 ± 35 （SD）個体が、センターでは、平均 38 ± 12 （SD）件、 21 ± 5 （SD）種、 47 ± 17 （SD）個体が救護された。両機関ともに、件数、種数、個体数ともに徐々に増加していた（図1、2）。

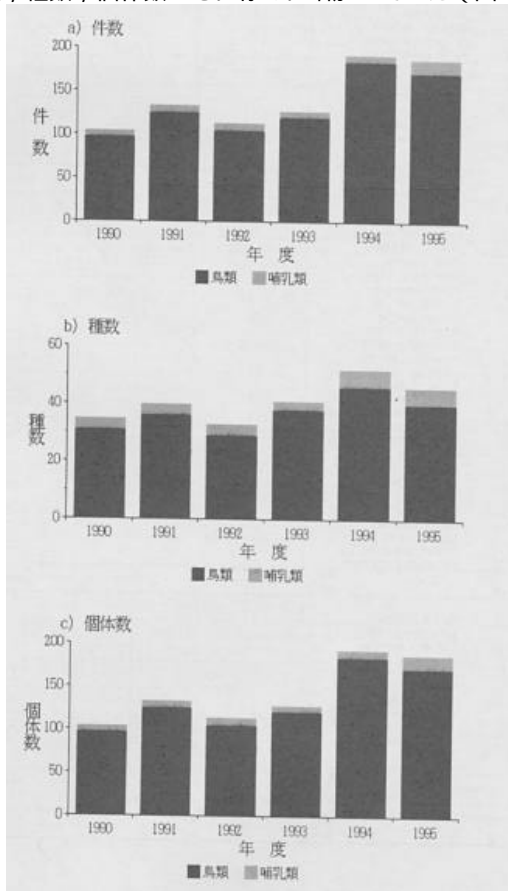


図1. 救護された鳥類・哺乳類の件数、種数と個体数の経年変化（福井県獣医師会取り扱い）。

Fig. 1. Annual change in the numbers of case, species and individual treated by the Fukui Veterinary Medical Association.

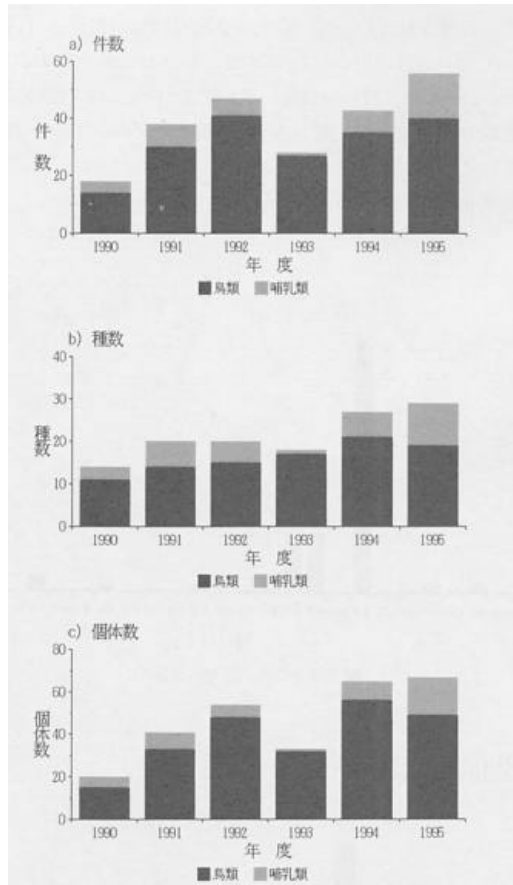


図2. 救護された鳥類・哺乳類の件数，種数と個体数の経年変化（福井県自然保護センター取り扱い）。

Fig. 2. Annual change in the numbers of case, species and individual treated by the Fukui Nature Conservation Center.

2. 場所と時期

県外から持ち込まれた個体を除き，6年間に福井県内で救護された場所とその個体数は，獣医師会では32市町村855個体，センターでは26市町村275個体であった。獣医師会，センターともに最も多かった場所は福井市で，それぞれ295個体（34.5%），75個体（27.3%）であった。次いで多かったのは，獣医師会では，敦賀市の149個体（17.4%），三国町の71個体（8.3%）であり，センターでは，大野市の55個体（20.0%），勝山市，鯖江市のそれぞれ30個体（10.9%）であった（図3）。このように，救護された場所は，必ずしも野生鳥類・哺乳類の多く生息する山間部ではなく，人間が多い都市部や救護施設が近くにある市町村であった。

6年間に最も多く救護された時期は、獣医師会では7月の127個体（14.8%）、次いで8月の111個体（12.9%）、5月の100個体（11.6%）であり、センターでは6月の46個体（16.4%）、次いで5月の43個体（15.4%）、7月の41個体（14.6%）であった（図4）。これらの時期は、多くの鳥類の営巣期や哺乳類の出産期であった（阿部 1994, 中村・中村 1995a, 1995b）。

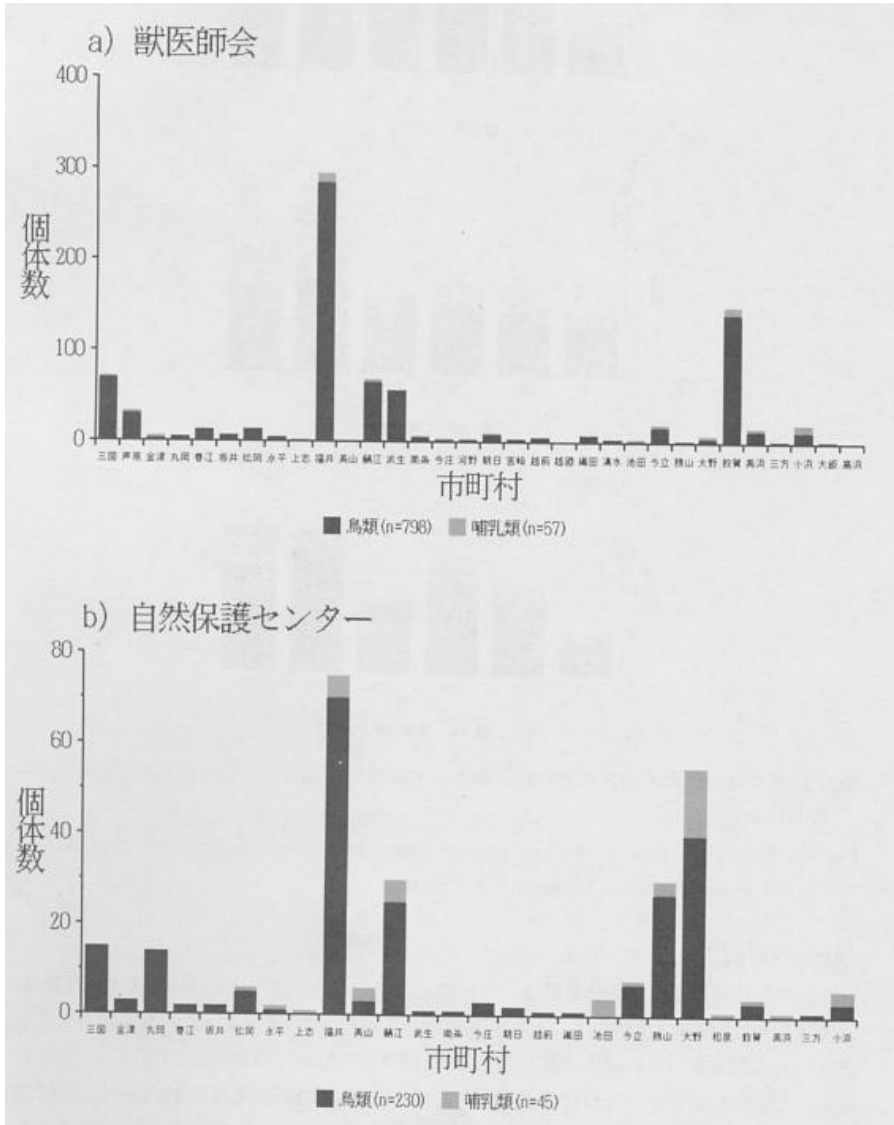


図3. 鳥類・哺乳類の救護された市町村。

Fig. 3. Locality (municipality) of protection of birds and mammals.

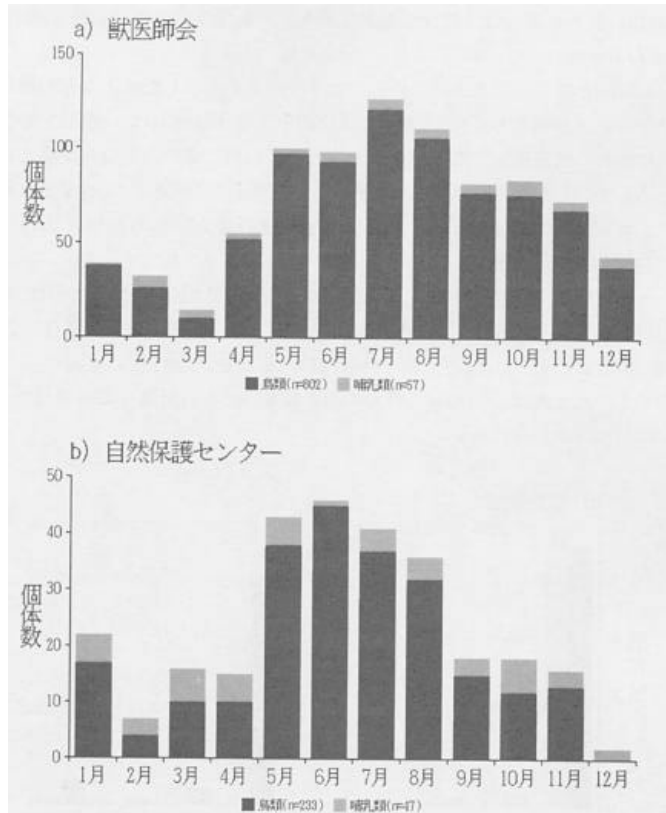


図4. 鳥類・哺乳類の救護された時期.

Fig. 4. Season (month) of protection of birds and mammals.

3. 野生復帰率

獣医師会で取り扱った個体の野生復帰率は、鳥類では46.3% (n=802), 哺乳類では38.6% (n=57) であり、センターでは、それぞれ40.3% (n=233), 21.3% (n=47) であった。最も復帰率の高かった種は、獣医師会ではマガモであり、センターではトビであった。逆に、最も低かった種は、それぞれカモシカ、キジであった(表1, 2)。カモシカの幼獣は6年間で計3頭が救護されたが、離乳時期・方法が難しく、かつ夏の暑さにも弱いためにすべて死亡した。また、キジの幼鳥は計15羽が救護されたが、給餌方法が難しく、かつ保温の不足ですべて死亡した。

4. 傷病の原因

救護時に判断された傷病の原因として、道路とその周辺以外で発見され骨折や外傷が確認された「事故」、巣から落ちた「落巢」、自動車と衝突した「交通事故」、釣り糸・針が絡んでいた「釣り針」、罟や網などに絡まった「捕獲」、外傷はないが弱っている「衰

弱」，他の動物に襲われていた「被食」および鼻水，下痢便などの外部に症状の出ている「病気」などがあつた。

「事故」の原因として，窓ガラスに衝突したり，崖から滑落したことなどが推定されているが，ほとんどは不明であつた。「落巢」，「交通事故」，「捕獲」は，「事故」のひとつであるが，届け出者の観察によって状況がはっきりしていた。釣り糸が絡んだり，釣り針を飲み込んでいたために救護された場合が，獣医師会で5例あつた。被害にあつた種はコチドリ，カモメ，アオサギ，コサギの4種であつた。また，他の動物に襲われた例が獣医師会で24例あつた。襲撃していたのはイヌ，ネコ，カラス類であつた。

最も多かつた原因は，獣医師会では「事故」の鳥類・哺乳類合わせて399個体（46.4%），「衰弱」の計342個体（39.8%）などであり，センターでは「落巢」の計82個体（29.3%），「事故」の計76個体（27.1%）などであつた（図5）。しかし，これらの原因は，二次的である場合が多く，たとえば，発見時，野犬に囲まれていても，滑落して負傷したところを襲われていた可能性があつた。

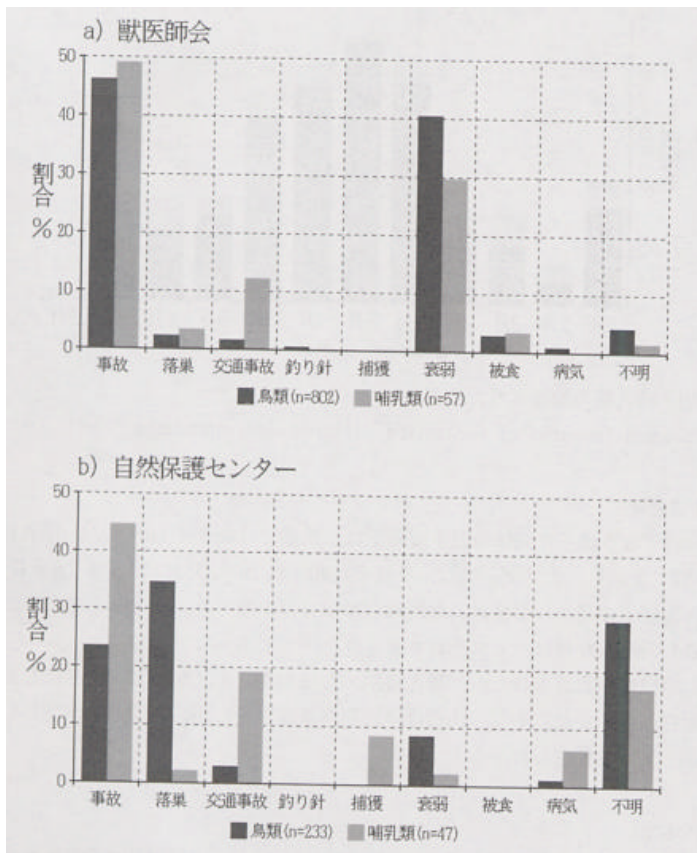


図5. 鳥類・哺乳類の救護時の傷病の原因。

Fig. 5. Causes of wound and illness of birds and mammals.

考 察

福井県における野生鳥類・哺乳類の救護事業

福井県において、ここ3年の獣医師会およびセンターで取り扱った種・個体数は、年あたり50～70種、161～258個体であった(表1, 2)。これは、他府県の同様の施設での実績と比較して、平均的な数である(BIRDER編集部 1996a, 1996b, 1996c, 1996d, 1996e, 1996f)。また、野生復帰率も全国と比べ平均的である(羽山 1996)。しかし、救護施設であるセンターが、最も多く救護される場所より遠いこと、センターに獣医師や飼育技術にたけた専門職員がいないこと、かつ飼育部屋の構造・設備が不適切であることなどの問題点がある。これらを改善すれば、野生復帰率を向上させることができるであろう。

また、傷病の原因を究明することは重要であるが、ほとんどが外見で判断されているため、また、直接の原因が不明の場合があるため正確であるとはいえない。少なくとも病理学的解剖が必要であるし、有害物質や寄生虫が原因ならば病理学的検査なども必要であろう(羽山 1996)。

野生鳥類・哺乳類の救護事業で保護されたシロエリオオハム、シロハラミズナギドリ、サンカノゴイ、ハクビシン、ホンドモモンガなどは、本県での分布記録の少ない種である(福井県 1982)。また、1995年に保護されたアライグマは、あまり人間に慣れていなかったことより岐阜県からの自然分散であった可能性がある。このように、この事業の記録は、野生動物の保護・管理を行なう上でも貴重な資料となる(大迫 1995, 1996a, 1996b, 1996c)。しかし、鳥類のミズナギドリ類、サギ類、シギ類、ヒタキ類、カラス類などでは種名が曖昧な場合があった(表1)。より正確な統計を残すためには、不明な個体については、撮影や計測を行なう必要があるであろう。

自然保護と野生鳥類・哺乳類の救護

自然保護は、生存のために進化してきた動物の生態、社会や行動を変えないことであると考えられる。つまり、捕食されたり、競争に負けたりして傷病を受けた場合、人間は極力手を貸すべきではない。たとえば、サギ類やツバメ類の雛が巣から落ちていたとしてもそれは兄弟間競争や子殺しの結果であり(伊藤 1992)、救護してやることは、彼らの生態・社会を変えることだから自然保護と相反する。ただし、傷病の原因が人間の活動にあるのであれば、救護して野生復帰させることが人間の責任である。

また、同じ種に対し、農作物への被害があるから駆除してほしいとか、逆に怪我してかわいそうだから救護してほしいという相反する要望が県民からあったりする。これらの要望に応じることは行政の任務であるかもしれないが、これでは一貫性がない。たとえば、三重県のように、有害駆除の対象となっている種(たとえばカラス類、スズメ、ドバト、ニホンザル)の救護については再考が必要であろう(羽山 1996)。

野生鳥類・哺乳類の救護は、鳥獣保護行政のなかで、その普及・啓発の一環と位置づけられてきたが、生物の多様性の保全という自然保護の本来の目的のためには、科学的、分析的な姿勢が必要であろう(羽山 1996)。

謝 辞

福井県獣医師会には、県の事業である野生鳥類・哺乳類の救護に対し多大なる理解と協力をいただき、また有益な情報を提供していただいた。記して感謝する。

要 約

1990～1995年度の、福井県における野生鳥類・哺乳類の救護状況について整理した。6年間で、福井県獣医師会では、鳥類の17目32科90種802個体、哺乳類の4目7科8種57個体を、福井県自然保護センターでは、鳥類の14目28科54種233個体、哺乳類の5目11科15種47個体を取り扱っていた。合計して、鳥類の計17目34科104種1,035個体、哺乳類の計5目11科15種104個体であった。獣医師会では、鳥類ではドバト、哺乳類ではタヌキ、センターでは、それぞれツバメ、タヌキが多かった。獣医師会では、年平均 143 ± 34 (SD) 件、 41 ± 6 (SD) 種、 143 ± 35 (SD) 個体が、センターでは、年平均 38 ± 12 (SD) 件、 21 ± 5 (SD) 種、 47 ± 17 (SD) 個体が救護された。件数、種数、個体数ともに徐々に増加していた。救護された場所は、獣医師会では32市町村、センターでは26市町村で、ともに福井市が最も多かった。多く救護された時期は、ともに5～8月の、多くの鳥類の営巣期や哺乳類の出産期に多かった。野生復帰率は、獣医師会で、鳥類の46.3%、哺乳類の38.6%であり、センターでは、それぞれ40.3%、21.3%であった。最も復帰率の高かった種は、獣医師会ではマガモであり、センターではトビであった。逆に、最も低かった種は、それぞれカモシカ、キジであった。多かった傷病の原因は、獣医師会では「事故」、「衰弱」などであり、センターでは「落巢」、「事故」などであった。本県での取り扱い種・個体数および野生復帰率は、他府県での実績と同様であったが、いくつか問題点を改善すれば、復帰率を向上させることができるであろう。また、傷病の原因を究明するには、病理学的解剖や検査も必要である。そして、救護の記録は、野生動物の保護・管理を行なう上でも貴重な資料となり得る。自然保護の本来の目的のためには、動物の生態、社会および行動を変えるような救護は避けるべきであり、有害駆除の対象となっている種の救護については再考が必要である。

引用文献

- 阿部永(監). 1994. 日本の哺乳類. 195pp. 東海大学出版会, 東京.
- BIRDER編集部. 1996a. 都道府県別傷病鳥保護マニュアル1. BIRDER 10(3):82-85.
- BIRDER編集部. 1996b. 都道府県別傷病鳥保護マニュアル2. BIRDER 10(4):80-83.
- BIRDER編集部. 1996c. 都道府県別傷病鳥保護マニュアル3. BIRDER 10(5):82-85.
- BIRDER編集部. 1996d. 都道府県別傷病鳥保護マニュアル4. BIRDER 10(6):80-83.
- BIRDER編集部. 1996e. 都道府県別傷病鳥保護マニュアル5. BIRDER 10(7):82-85.
- BIRDER編集部. 1996f. 都道府県別傷病鳥保護マニュアル6. BIRDER 10(8):82-85.
- 福井県自然保護センター. 1994. 平成5年度年報. 18pp. 福井県.
- 福井県自然保護センター. 1995. 平成6年度年報. 16pp. 福井県.

- 福井県自然保護センター. 1996. 平成7年度年報. 14pp. 福井県.
- 羽山伸一. 1996. 野生動物救護の意義と課題. 野生動物救護ハンドブック - 日本産野生動物の取り扱い - (野生動物救護ハンドブック編集委員会編) pp1-26.
- 伊藤嘉昭. 1992. 動物社会における共同と攻撃. 258pp. 東海大学出版会, 東京.
- 中村登流・中村雅彦. 1995a. 原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 301pp. 保育社, 大阪.
- 中村登流・中村雅彦. 1995b. 原色日本野鳥生態図鑑<水鳥編>. 304pp. 保育社, 大阪.
- 大迫義人. 1995. 1994年福井市で落鳥したシロハラミズナギドリ. *Ciconia* 4:41-43.
- 大迫義人. 1996a. 1995年福井県美山町で保護されたサンカノゴイ. *Ciconia* 5:55-57.
- 大迫義人. 1996b. 1996年福井県で保護されたシロエリオオハム. *Ciconia* 5:59-61.
- 大迫義人. 1996c. 1995年福井県鯖江市で記録されたホンドモモンガ幼獣. *Ciconia* 5:103-106.
- 柳川久. 1993. 北海道東部における鳥類の死因. *Strix* 12:161-169.
- 柳川久・濫谷辰生. 1996. 北海道東部における鳥類の死因. 帯広畜産大学学術研究報告 19:251-258.

Status of birds and mammals protected in Fukui
Results in fiscal 1990-1995

Yoshito Ohsako¹

There was analysed the status of birds and mammals protected in Fukui in fiscal 1990-1995. Totals of 802birds of 90spp. and 57mammals of 8spp. were protected by Fukui Veterinary Medical Association, and totals of 233 birds of 54 spp. and 47 mammals of 15 spp. were protected by Fukui Nature Conservation Center. There were recorded totals of 1,035 birds of 104 spp. and 104 mammals of 15 spp. in Fukui. The numbers of the Rock Pigeon in birds and the Raccoon Dog in mammal were the largest at the Association, and those of the House swallow and the Raccoon Dog, were the largest respectively at the center. On yearly average, 143 individuals of 41 spp. of 143 cases were protected by the Association, and 47 individuals of 21 spp. of 38 cases were by the Center. The numbers of individual, species and case all increased year by year. The largest number of protected individual was recorded in Fukui City. Many birds and mammals were protected from May to August, when they bred or gave birth. The ratios of individuals recovered from wound or illness were 46.3% in bird and 38.6% in mammals treated by the Association, and were 40.3% and 21.3%, respectively by the Center. The wound and illness were many caused by accident, falling from nest and weakness. The numbers of species and individual, and the recovery ratio in Fukui were same with those in other prefectures. However, improvement of some problems may enhance the ratio. Pathological dissection and examination may be needed to clarify the causes of wound and illness. Scientific and analytic attitude is

needed in order to conserve the biodiversity in the enterprise for protection of wounded or sick animals.

1. Fukui Nature Conservation Center. Minamirokuroshi 169-11-2, Ono-shi, Fukui 912-01